

齊董集

卷之三





○ 火爐并地火炉再考追加

嫁迎記

嫁
へふ夜

袖 葦

「あひを乃よいきゆうの事といふ。傳よ」「ふ袖だいがん。こたつの事」とある。されど山鹿の火爐の事と謂ひる古事記は、當時も今もとて火爐のありし説ともべ。さればとてあり。文明以後よりぞき。前々墓に決り。唐脚炉と云ふ如し。脚炉足をあらめし。東山廬のどううりが取るべ。前々墓にりきる。窓の外とす。かうき捨巻の國也。

宗長手記 卷下 大永六年十月の條

「火爐あらゐる火搗。物うす御坐て。紙子ふ火のほくをもーらひ。かううれし。火爐あらゐる火搗。」とある。火搗又おーそあくべ云。又云。又同七年十二月の條。火搗のうづき。火搗又おーそあくべ云。元本火搗の字よりかへつけざれども。火搗の二字をこなへてよむべた例。明應の撰。ことひ林逸節用集。火爐脚搗。又あそと云ふ。たゞかく。とあるをつり。されば者便うく火をことくと搗をたつともむ。当時の讀くせゐるべあせば。火搗の字をもこたつと讀べま。

○まもろの書よ「火爐あらゐる火搗」とあるを考る。當時こころとじよへ。今云こころやから事とまこと。今火爐をこころと云へばよ。嫁迎記によひてある。

印本今昔物語 卷一 惠明云の條。火爐乃灰をかちく取る物也。火爐乃灰をかちく取る物也。とあれど日本 みに火爐の字も。印本かあら後のまくらも。印本の三をそ。

こたつの名ひよ。とみありひまくひそ。

○前の火爐の考への因よ。火爐の本をひるよ。引りこすとよ。舉。

續古事談

卷一

一条院の御時。墓盤所よく。地火炉ほくごと云まへ。云。

葵花物語

五のうをあひの卷よ。厨子所の御をもとれべ。云々。又たゞとあけたる

やうべらのほきく。おひへ六人。ちひろのりもにねあひて。がりのことをぐめり。薪撰字鏡=火爐の字の訓。火炉とあれば。ちひろへ地火炉といふが如し。ことにやひに近ひ。世の庭竈へ地火炉ついで。の遺風うべ。唐土の緩火會も似たり。

○地火炉の事は外すもあやめく。けれどもたゞあくまうにかたをくまう。や

右小引る。中古近古の書ども。假字のところを假字もかやうれど、その手にあつて、ほのりと意をあらひど。古書のまことを考へよ
おひがねばより。又字音いかのれがどる言ふも假字のたゞるぞ
かわかる。いふよせん。他よあつてさせつれば、それをあらむむじりとあ
ゆく。又字をゆきあやまつもあやかべー。○是書のかもむきあらごとくとる
べたことあら。凡例よつざらうれど。いまご板よ雕さのび。書賣前快二
卷をとくせよ弘くんとく。くらりとくねれば。すむとくと得ど。後快の
卷首よ載べくもりく。そろひへ。次の正一ゆきと。みゆがりと。

○後快目録

下之卷前

- (一) 離杖考。打離樂圖古製。
(二) 端りの考。碑毒閑。
(三) 羽子板考。今制かぐの圖。
(四) 粥杖考。北越の祝木の圖。
(五) お乳母日傘とく謡の原。

- (六) ゆみの名義ひの假字。(七) 離遊のもと。(八) 離社離合。
(九) 源氏物語の離拵。(十) 古書ども小ええー離拵くそく。
(十一) ひのなの調度。(十二) 古書ども小ええー離拵くそく。
(十三) 室町家の比の離図。(十四) 伊勢の小米離。
(十五) 離遙。三月三日小さきうつ考。(十六) 唐の時三月三日鏤人あし事。
(十七) ひの繪櫻。昔の質素あり。離桜の。(十八) 享保の比の土離図。
(十九) 離の使図。築く。(二十) 離枕折敷図。覺敷。(廿一) 後離の考。
(廿二) 姫丘の離。(廿三) ひいか草。▲上已のひな考の事。ひなねびの主意。ひなねびをひめく。

下之卷後

- (一) 子日の離遊。(二) 贋物のひいふ。▲されぬらゐの假字を用ひ。くもせ泰の假字。
(三) 勸進比立尼の繪解。(四) 屏風の古画。朋殿。その夜とくらむ。▲のまづり。喝食とく。見とく。
▲のまづり。小五打のうぶ物。▲のまづり。小五打のうぶ物。

- 六 端午の頭巾簾 独小人形・其角が後白の解。七 端午の菖蒲花
 八 あらうきの念佛の古圖。九 後妻打考 同古闈 古晉より
 十 比比丘女。童子の子も。十 酸漿を吹くと本今よりも八百年ぢ
 前をあり證。十一 小兒をかどてよだわとのりの考。十三 カレねび。白地襷。今えか
 十二 手鞠考。十五 たぬぐの牛馬。十六 上古中古近古の女の髪の風。某ひが
 トコロの古圖あり。たりをよこすと。十七 中古近古の編笠の考。其角が富士の山の邊向
 ル。十六の井戸の水の邊に立つて。十八 梶久坂牛。十九 梶久寄進船。たぬぐ踊の考。同古闘
 解。廿一 ひんだの踊。掛踊伊勢踊。廿二 船。たぬぐ踊の考。
 十三 あらうきの古圖。廿三 お国奇舞妓の古圖。廿四 助進聖判職人音合。廿五
 僧助が糸くじを拂ふ。廿六 お國奇舞妓の古圖。廿七 いのちめいのう。今云玉のうと
 やひでとくろううひのう。
- 一 絹屋の白袴再考。出でてよし。勧進聖判職人音合。二 竹馬再考。**
▲ 再考標目
 卷のきづに附る標目だのうと
- 三 菖蒲帽再考。園木晉。前内侍日記。四 粉の看板再考。上
 五 錢湯風呂再考。湯浅。五とくとく。五とくとく。五とくとく。五とくとく。
 六 石榴風呂鏡磨再考。・湯浅。の錢湯風呂をわら風呂とへん
 七 伊勢の風呂吹再考。引りこじる。八 くも帶再考。・脣服令義解
 縫帶のくもと縫帶のくもを繋がく。九 豆腐をかどりの言。諸臣の礼服の下。
 十 提灯行灯再考。・薬農鉄。その外引りこじる。十 さよあらうのち毎うらん再考
 前の考のまゝなほの更綴のやううこ綴をそなうらん再考。十一 さよあらうのち毎うらん再考
 あるべくがく。十一 さよあらうのち毎うらん再考。十二 爐燭再考。諸首を引く
 十三 伏編笠名義。十四 桔梗笠淺葱帽。・貞徳文集。新續大つば集。おを
 十五 深世御坐再考。・和訓鑑。ようきの菖蒲うさと。十六 奥を手こと云言の再考
 十六 硬蓋再考。今昔お語。硬蓋の者ひの交遊子。十六の外古事記。うかうかの民風
 食物の國。東山殿御飾記。君墓標。十六の外古事記。うかうかの民風
 わけをたずねた。奉事をあることを。此翁は。本草。五月まつりと
 本傳抄。あらうきよじと再考あり。

處訓往來の物の物のとくのとくのとく

を多くみたび請問を参考して年鑑をなせ

- (二) 無木といふ物の参考。十訓抄 雜叢抄 あらうえなむ無木齋のことをとくとく
(三) 一二の参考。前より長門本平家も流を引く再び考へ
(四) 根本雜事参考。此經の本名ハ根本說。一切有部毗奈耶雜事と云
卷第十六小獮猴投票の本ゆゑ佛與天授の語。義楚六帖
署文にて異同あり色々かどれをたゞ。此外は参考あるくあれども

以上後帙二冊來乙亥春發行

- (一) 前帙二冊の引書がわづかうるに草紙繪物語のとひあれど。近古物語のうちすもまたこれ本まつろめれば。當時を考るたゞ
あきらめゆど。されば識者の看かあつべたりのうね。その眉目を挙ぐ
(二) 後帙二冊へりから古唇を引つれど。ひとひやうれば。これもとくとく眉目を挙ぐ
用ゆる次よあつべひであるせり。

▲ 漢杖の考引書

- 萬葉集 ○ 繕日本後紀 ○ 和名鵠
○ 事物紀原 ○ 遼史 ○ うつほの物語
○ 源平盛衰記 ○ 平家物語 ○ 義經記
○ 袖中抄 ○ 日本歲時記 ○ おれ草
○ 遊學往來 ○ 訓蒙圖彙 ○ 源氏物語
○ 下學集 ○ 世諺問答 ○ 中山傳信錄
○ 盡囊鉤 ○ 和漢三才圖會 ○ 滑稽百難談
○ 本草啓蒙 ○ 三才圖會 ○ 年中定例記
○ 三才圖會
以上
十四種

船杖考引書

- 清少納言草紙
○増鏡
○日次紀事
○年中故事要言
○和名鈔
○日本紀
○古事記傳
○源氏物語
○狹衣
○紫式部日記
○あけろへの日記
○塩壺鈔
○無言抄
○加茂保憲女集
○名物六帖
○鋸屑
○土左日記
○諸国奇遊談
○滑稽雜談
○和漢三才圖會
○丹後守為忠家百首
○女用花鳥文章
○江家次第
- 離遊記
○拾芥抄
○御傘
○國朝佳節錄
○雍列府志
○其袋
○日本歲時記
○昔ニ物語
○五元集
○續猿蓑
○增山の井
○文昌雜錄
○五元集
○續猿蓑
○女用訓蒙圖彙
○本朝食鑑
○朱もくさき
○異本和泉式部集
○年中風俗考
○日本紀通證
- 下紐
○日本風土記
○和訓繁
○さとゆはや
○清少納言草紙
○濱松中納言物語
○増鏡
- 玉かたま
○厚顔抄
○中華集
○榮花物語
○瀬松中納言物語
- 弁内侍日記
○日本歲時記
○婦人養草
○簾中舊記以上十一種

骨董集上編中之卷

江戸

醒ニ輯

○名古屋帶日

文祿前後より寛永の年その古画と見る男女を以て縄と糸と繩又似たる
兩色の総とつけたと云ふもかくして帶をもつて体をまとう其色は
白あり紅のり青黄赤など或赤にて彩色あるもあり按て是いゆる名古屋
帶あるべく昔肥前の名古屋多く唐糸とて組むゆゑ名古屋帶も是
又組帶ともいへと或人いす和名鈔腰帶類云綱帶和名加良織絲為帶也
とあり加良久美は韓組そ名古屋帶に此韓組帶の遺制小やあん又源氏
梅枝の巻ふ「だんのひくみおひも」として見らるゝ卷物の組
和名鈔衣服玩具云「四聲字苑綾青而黃也」文祿前後古画ふ青黄
赤かどいいろどりたる組帶ある是則綾れかくとて帶をなすき歟

一代男 天和二年二之巻ふ 小幡山の名木落花
印本
一ノ下男達其比ハ捕手居合しやうく世の風俗も糸鬚ふくろうけ二寸
掛せ簪上毬のくして袖下九寸たゞ。深分の組帶。やうけの長股指あごと
れり人太形は是王城小住人の有様今いふべく昔と捨てそり 北野ニ詣で
掛てらし大谷小行て者と一折鳥部山の煙と五くつぎの吸啜筒小者又
アシん毛巾着ひがるもんをありと云く 〔出文書繪と云く〕其比と云ふ慶長元和乃
じよまでより此一代男ハ西鶴の伯から此人に寛永十九年の生もれの幼時
まれきぬと成り立たんと云ふ。證もあらずするに至る。其の後の組帶も終乃の
との帶のやう歟當時の男がてなるも組帶とひとびたらもわん 同書 五之巻
小筑前柳町のまゝと云ふ處小組帶屋とて名目見えず當時の筑前ゆゑも組
帶と帶一たぐりと云ふて細の名古屋帶へ便利なうゆゑ寛永以後へや
すれだ。も貞享より享保の比乃草紙ともに往ふ見えてる組帶名古屋

織の帶。糸打の平帶。名古屋打の房帶。など多くて、寛永以前の古制の如き丸打糸
で平打と今之糸とが類なり。

万金産業袋

享保十七年印本 卷之四小云「名古屋織男女の革糸をもどり女革に縫つて

幅四寸から男革は幅二寸五分から女革は一寸六分只一枚かわらるゝが名古
屋織と云ふ袋打たういと夏革をかう」とあるく古名のものか。古制よし

と承知す。

○再按に **竹齋物語**

寛永中書。折や一幸人より奉りてそなますへた。今傳うけとて

此れも多分やくどかやひそむをされしとひやはあはれぬめ。上人廉子は
とく耳はる小袖をもとまく湯衣へひづめ。常へ天下にやれしに二条通は百足屋
上人ぬか湯革とえりけ心とつゝてさんば革の八つ打。金もばまくぞもれり
云ひ。やうと組革れどりやうれ。或上人の仕事束とる。条をもとだく廉子はまく箇の
せは小袖をもと成りておこぶ當時の女は仕事束にかくして戯作かく。一幸人傳へよ。

今モ——の僧た帶

と正のものとさへ一かじを糸組の革の僧家とぞ用ひ

たん既小利休の像と画くに糸組の上革と道服の上小革

とぞ。御伽婢子

とぞ。

とぞ。御伽婢子

とぞ。御伽婢子

とぞ。

とぞ。按これ原剪燈新話の金鳳釵記と翻案一例。物語かれども金鳳釵
真紅繽葦につれて天正年中。たゞ當時此革とりて用ひて。寛文乃
比までひつて入るゆゑかく。一絶に傳り

○火鍊

日

火鍊と云ふ。近古にててるもなり火鍊のなれ以前ハ物に尻附て火鉢を足を燐
れまゝ。古き繪巻々其体とそがれあつて。右に番内れば左に摹出せり

下學集

火鍊

火鍊と云ふ。近古にててるもなり火鍊のなれ以前ハ物に尻附て火鉢を足を燐

て火燒のことをいふを文安文明乃比毛を火燒と云ひたからとす筆

饅頭屋節用

文龜中初刻 詞花堂藏本

火燒火踏

以後ふそで一あがみ下 以後ふそで一あがみ下

清俗紀聞

冬

火と用ひ極寒中かを手足冷る時の脚炉

火

火と入て灰と覆ひ椅子の前或は睡床の前より坐て足と其上小董て温る云々。地炉



○名古屋帶古圖

接子の如き

腰前

○寛永二年印本

桔梗み初宿香花園小

富士山の秋の風景

冬の夜の雪景色

月の夜の廻園と打合せ

月の夜の遊戯

又寛永より明暦の

比の俳諧の句

火燒とてよしとゆき

かひれ様とまづり

か櫻の号ひでまーん

かん

○文 明以前火燒

時代火鎌を

足と向ひ体へ

寝てよしとゆき

かみ縫卷子

載たり

調花堂藏



○かどやき 小説

鰻燒 棒燒 へ其燒たる色紅黒からく棒燒皮小供たる名花名からし諸書より
い不 痘の説から 新猿樂記 小香疾大根 とくに名見とあらこへうそとて香乃疾く
他比 鼻小入れ謂たる名を鰻燒と香疾によく相當たる名かり鰻燒と燒るやう
いふやうに 説へ 鰻頭屋節用 文龜 衣食部 と白壁 廉 かくは如くとぞ。又 海人藻斧

ふ破へ供御。酒へ九曲。鱈へらん。味噌とばむ。塩ハちろえの。豆腐がべ。索麪ハほそじ。松草がす。鰻ハこり。鮒ハふり。とくとくとれを今大和あくまきつゝもれん。三
百二三十年前既とくへたる異名へ奥書あれ。文龜ち少一前

○桃燈

四

桃燈れども詳かくと 古今夷曲集 客人代ゆき送る桃燈へまことにつけ私ども
月景 定家卿 とくとく此歌古書小所見なれを證へ。秋乃夜長物語
後堀河院の御宇と西山の御宇と桂海の御宇と律師とくとく人三井寺の梅若とくとく児と表同寺の
或坊とくとく居とくとく此児其坊とくとく行と絶け。条に云 け行とれつゝ月の

韓 塠 戶

名はいはなむら、姓はタカハシ。文安の書院北校障主。

西からぐままであらうと、下まへておれど、僕今あらうおとする書院北校障主

下ち遙ひより下へたるはれは、臺柱(てんしゆ)の金(かな)水(みず)干(かん)を立(たて)くまかのしゆゑ。いとん

入(いり)てきるだらうと、光(ひかり)をくらはせらるはれは、臺柱(てんしゆ)の金(かな)水(みず)干(かん)を立(たて)くまかのしゆゑ。いとん

韓 塠 戸

文安 下学集

五

宝德 七十一番職人歌合

鎌倉年中行事

管領のりくん御参の

行列のりくん御参の

上

當時のりくん御参の

上

の条軍用乃と成り所よ下荷駄馬一疋と挑灯二つをもて結付馬負ひも一人
ふ一つば續松りてありやれを當時に挑灯へもと軍用よりしりた。然

元亀天正或古説ふ。永禄天正の比へ籠挑灯も今世比ぐるに挑灯も有じ

文禄慶長好古日録ふ俗に云箱挑灯へ一の時始て制す上下と藤葛を以

編たり板と用ひ慶長以後は事と天正已前は挑灯へ籠と紙を粘して用ひ醒ら

左より古此説より此説より古説と合せ考みばたゞむ挑灯へ天正以後は物あらず

寛永正保慶安五呂吟我集未得著

寛安三年「尼姑がくわうぐまかられ挑灯」引うづき行ふゆ

とる狂歌あれど既に當時やづと挑灯とよもれり承應明智

草紙れ繪紙とてを竹丸と絵丸と九き挑灯とけくわたり今之高挑灯れたゞ

手挑灯とくまとと万治貢文訓蒙箇彙

寛文六年印本ふ丸と挑灯と柄とけくたまり今之

挑灯とくまとと如一水鳥記寛文七年印本の繪ふ棒れくまと箱挑灯あり能諧夜錦集

寛文八年印本五年乾坤乃

指挑灯とくまとと當時の指挑灯をえもと用ひもと

延宝延宝六年板菱川繪本ふ箱挑灯と柄とつけたものあり當時うもとくと用ひたり

とてゆ隱蓑延宝五年印本附合れ小手りひの煙とそろ挑灯と見えられを當時に漆中挑灯

もてり一とて當時高挑灯少く丸と紙用ひてとてをもてて提ありく提灯と

とててて但神事葬送とて丸と紙用ひてとてをもてて天和貞享元禄當時

印本れ草紙の繪と参考すれ延宝うり元禄れおもてをもくと柄れつて箱挑灯と用ひて

棒とくまとと箱挑灯とより雍州府志貞享元年文匣并挑灯之類悉張脱之とてり

代男貞享三年印本卷之四民家れ婚不の置と柄れつて箱挑灯と持て行体とけんべ式正

小も用ひたゞ一正保柄れつて箱提灯とてとてをもててかくに不便とくと

なれどやもれくとや當時り棒とくまとと箱挑灯とてとてをもてて正徳和漢三才

昌會ふ棒とくまとと箱挑灯と出で享保西川祐信の繪本其外當時に繪とくまと

見くと棒とくまとと箱挑灯と用ひたゞこそ享保十七年れ印本万金産業袋卷之一

火類とくまとと条ふ馬とくと人無事船と弓とからくとくとくとて接よ今

弓張挑灯と云ふ馬上挑灯と云ふ本名を元の武家方よりよみぐれ享保以前に繪て此挑灯所見を一享保以後にまことにものかとて挑灯と云ふもので絵をうけたる今弓張挑灯をとて便利な物とてこれにて多くは器物昔よりを今まことに物をやう唐士と今もての挑灯をとて唐紙の性によじゆ多本挑灯金比類紙として製して行つて実小御國の紙ハ万國ふらひのり至宝なり

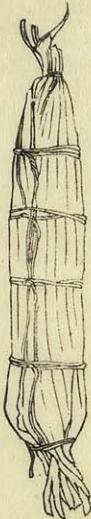
○和名鈔 尚一 小云蠟燭の事ハ 余義解 主殿寮油火爲蠟燭火爲燭 一見それを其の秉ふ

不審れ説あり

○羽州松脂蠟燭圖

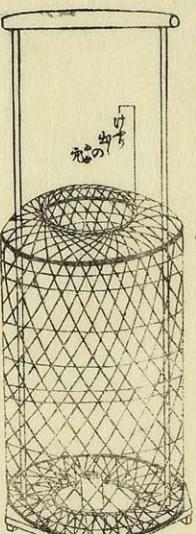
長曲尺八寸五分余

蠟燭乃は松脂とて
此を蠟燭打乃竹片
備れ點て火と引く事す



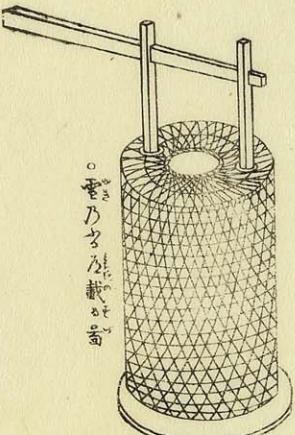
○羽州篠挑燈圖

○總高曲尺三尺二寸余
蓄高一尺二寸余
支て表紙と紙と繋げ
て用ひ



角六板臺

○籠と上へあげて少しだとまとも
やうにつゝ唐紙板と竹筒と
立て右の松やうらうと
えし料りん



○雲乃下み載る箇

○雲乃下み 羽州の紙家
さ屬するの紙にて、筆者所持つて
ありて、よしとて、くわどく、もとて、もとて、
見とて、のりは成るが、うるが、うるが、
土壁とて、みるが、こと、と、空き、ゆく、ゆく、
の、底、歸る、ひり、かく、
古制れ、今、
の、ね、く、う、

○寛文七年印本

水鳥記

呼載

○當時ハアハ如く

構乃方丸箱挑灯

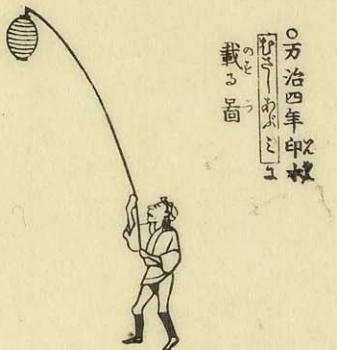
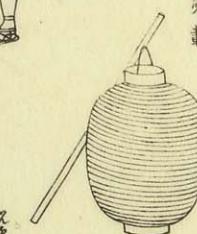
○寛文六年印本
訓蒙品目集

呼載

今後ハアハ如く



○元禄八年
浮城百人一首
呼載



○万治四年印本
行燈
呼載



○宝永五年印本
諸士百家記
呼載



ええ
行燈ハ始詳記下學集
安燈籠
行燈挑燈ツカヘシベシ
鎌倉年中行事徳之。行列。縦
松行燈スギノトウラン
と持てられたりと云ふす
接焉行燈タタキハシマツノトウラン
先家内アキナミと名宣物アマニモノにゆく
讀松八便スギノハチイケ
多承多承
灯火もかひて風フウをもたらす持てりく為に造生アラシムたるものかべ
然則字義アラシム

りて民家ハ端近く風をあたゆるに灯火ふかしむるが便ら良也後ふ燈臺タケ用ひたるや河カニ人ヒトと永正御撰何曾カシマのうちには僧比案サムライの物手モノ手モノあらざるどドと人ヒトを

行カニ火カニと解カニ何曾カシマより傳カニマツの譽カニシキハ魔カニヤ之物モノもれカニシキ鉛カニシキ之これとらんカニシキとよが古言カニシキタ

下学集カニシキ小行燈カニシキとカニシキが波カニシキのたゞ後カニシキふ上木カニシキある時カニシキ乃カニシキあらわしカニシキ一真徳カニシキ乃カニシキ御金カニシキ

ゆカニシキ行燈カニシキとカニシキが波カニシキけ下カニシキ

女峰集

佐見鑑本明燈カニシキ松カニシキもカニシキ物モノとカニシキ波カニシキ

行燈カニシキてカニシキ事カニシキかカニシキる夜カニシキ八月カニシキ面カニシキ嵐雪カニシキ

鷄草カニシキ卷カニシキ五カニシキよカニシキ。古老の物語カニシキは今カニシキ世カニシキに有カニシキ謂カニシキとカニシキ人ヒト皆カニシキ有カニシキ事カニシキばやれカニシキとカニシキ今カニシキ如カニシキ手ハンドと中カニシキよ約カニシキ近カニシキきカニシキなり昔カニシキ路次カニシキ行カニシキ燈カニシキかカニシキとカニシキよあカニシキ手ハンド今カニシキ如カニシキ手ハンドと中カニシキよ約カニシキ近カニシキきカニシキなり昔カニシキ路次カニシキ行カニシキ燈カニシキ如カニシキ底板カニシキふカニシキ燈基カニシキと蓋カニシキた底板カニシキ遠カニシキ別カニシキとカニシキ行カニシキ燈カニシキをカニシキそれカニシキ角カニシキ行カニシキ燈カニシキにカニシキ燈基カニシキと蓋カニシキ中カニシキに約カニシキ始カニシキ此カニシキ説カニシキ如カニシキ行カニシキ燈カニシキ古カニシキ製カニシキ今カニシキ茶人カニシキの用カニシキる廬地カニシキ行カニシキ燈カニシキと

物モノとカニシキ知カニシキべカニシキ其カニシキ製カニシキ作カニシキ歩カニシキふ便カニシキとカニシキこれカニシキ元カニシキ内カニシキ小カニシキとカニシキ造カニシキてカニシキる

上野カニシキ遵生カニシキ八牋カニシキ小カニシキ有カニシキ柄カニシキ曰カニシキ行カニシキ燈カニシキ用カニシキ以カニシキ秉カニシキ燭カニシキとカニシキ唐土カニシキ行カニシキ燈カニシキ此カニシキ方カニシキ乃カニシキ挑カニシキ灯カニシキとカニシキの

元禄二年印本

本朝櫻陰比事

序載

序載



○笠北下カニシキ小布カニシキと垂カニシキ

六

本朝櫻陰比事

序載

秋齊間語カニシキ宝曆三カニシキ年印本カニシキ卷之二カニシキ亨祿二年カニシキ古画カニシキと載カニシキ左カニシキ此カニシキ今カニシキ案カニシキ主人カニシキ比カニシキ女カニシキ被衣カニシキとカニシキ此カニシキ市女カニシキとカニシキ此カニシキの女カニシキ下カニシキ女カニシキ手ハンドくいカニシキのうカニシキとカニシキ此カニシキ布カニシキと頭カニシキとカニシキ其カニシキ小笠カニシキとカニシキたり職人カニシキ歌合カニシキの女カニシキ頭カニシキとカニシキ布カニシキとカニシキ別カニシキ主カニシキ

秋齋間語
所載亨祿二年古画

亨祿二年を今
文化十年より
やを二百八十五
年比昔ながら當時
の女形風体の如く
なり此圖密画
ヨシタマレモ甚
おもひゆと
思ふべ

主人ノテイ 今云
カツキテイノモノヲキ
タルカウニキタルハ大
ウチキノテイトイヘタリ
市女笠ハカミソコ子
サルタメカ

一向ノ下女ノテイ
ナルヘシ袋ヲモタ
スルハ古風ノツヘ



京山模寫

○杏花園藏本
寛文二年印本
要石明載



○ふせ見古畠と參考する
寛永 實文天和比才也
かくし本とぞれて
ある人の筆をあらわす
ふたての筆をあらわす
北山道風とぞ
老女は寒いとぞ
着物の面とぞ
かくし本とぞ
著物の筆とぞ
あらわす

○調花堂藏本
天和四年印本
葵川の傳
此畠あり



老女之体也

○絵画
亨祿二年印本
此畠あり



○寛永時代古画
此畠あり

○絵画
亨祿二年印本
此畠あり

○絵画
亨祿二年印本
此畠あり

○ 女の編笠塗笠

[七]

婦女は編笠塗笠と申す。古き繪巻を今見る所によれば、女は面とあらわして此の道を行ふ漆笠と戴き、又へ覆面なし。販賣女も面とあらわして歩行する。寛文時代より女は編笠塗笠と薄くて少しくて面とあらわして歩行する。寛文二年の印本江戸名所記かどの繪と見て考へたり。獨語云。江戸に婦女外出せられず昔はこまごまと黒き緋とて此面とあらわす。其後緋を淡面とづる。宝永はからまをあらがり。此の内則甚ぞ出門必擁蔽其面。とあるものである。

毛吹草。維一丹撰。正保四年刻。

花笠とならぬと申み。紳

元弘

嵐山集。慶安四年。令徳撰。明暦二年刻。

紫乃霞面。一ノ絵鳥よぐ

良保

幕次く。延宝六年刻。

附合の句

松意

幕次く。白は紫乃霞面。元弘八

二代男

貞享元年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

三代男

貞享元年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

四代男

貞享元年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

五代男

貞享元年印本卷之五小云「四十七八年鼻頭に露草色比布子にも」。甲子

其袋。嵐雪撰。元禄三年刻。

花笠や男若弱だ。花乃山

百里

當時の男は花笠やうだ。俗は花笠。元禄八年印本卷之四「四十にはまく。女は花笠と今に兵庫曲げつけ。淡黄ふうこん裏に下足。足代よりえきの細いつけね。花笠からつきぬくと申す。たまに赤いもんばかりいわゆる花笠と申す。これ

當時の塗笠は足袋共もとく古風ふうじとゆべゆ
をてらせに千ぞうどこの紙綴と村下が當世様みゆく
をりとくに安永乃は昔ふるのをゆ。しとく

俳諧日本國元禄十六年印本

詠合の句

堺
灰重

是等も當時塗笠れおもろす。一證ん松の葉
七絃人ものとけまぶつておめなれ。ゆづれ笠の
きみうでさ

花見車

元禄十五年印本
松蘿館藏本

初音ややくわんーだ女子八月

朱拙

和漢三才圖會

塗笠
用薄片板紙張之漆黑色出於京師及大坂

同書越前國

土產之部塗笠出於我衣

右老はねと圓おーだふ云
曳尾庵藏本

小兒は塗笠小ぢかにて内よ筋

牡丹梅椿水仙枯梗

燕子花等と画

紅あざむけ紐と引通すそ絆え

○寛文二年印本
江戸名所記

耶載

孔雀樓筆記

貞享の時の
繪と此圖



同書



○當時

金笠

所載

漏笠

所載

小袖

所載

○貞享四年印本
武道傳來記

載圖



○天和四年

印本葵川師宣

ふねの音

當時の歌

綿の頭面

中年女又老女

かく見

す



物類称畔

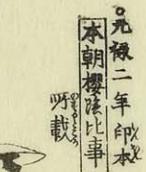
津帽子
はなこてがそ
とひの場所
ほとふ肥後毛
こもん後とふ肥後毛
てがそくふへ腰革大り
とひり。腰にこれ製作形
めだらの又物の物工
うれでぞそとひのうえをさう
葵川北嶺がいにが美能女
紫れかうすある体と多く
えびの毛をみてられど
ゆく

すれひきして手細
ひかく金く腰革と手細
と北嶺と謂かく人を細本と
ひよぐかなる金



大和名所圖

天和真享
元裕化丸女織蓋形
寛文延宝比人くく腰毛と毛を
當時あま縫合うかくあり袖比
小女二葵川北嶺は腰毛と毛を
小女郎手と見て男子もつりう文字と
少子がわくの名をまくらぬくとく
白毛と毛をもとて腰毛と
もやも腰毛と毛をもりと
毛をもとて細密と細密と目撃と
腰毛と毛をもとて腰毛と
腰毛と毛をもとて腰毛と



元裕化丸年印本
本朝櫻藻比事

所載

○元裕化丸年印本
本朝櫻藻比事
和漢三才圖會

和漢三才圖會

乙巳年子社堂書

○桔梗笠

八

犬子草

寛永十年刻

桔梗笠

吹草

正保四年刻

桔梗笠

玉海

集明暦二年刻

桔梗笠

日暮似草

花明暦一年刻

桔梗笠

物忘草

明暦三年刻

桔梗笠

歌謡集

寛文五年撰

以上六部在歌堂藏本

桔梗笠

德元

吉政

喜雅

作者不知

蝶之子

作者不知

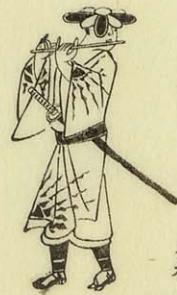
右此如くうべに能詣れ句集ニ桔梗笠と云ふを考へて當時もくらべての笠を考へ
とくればいづれか。形外のくももくらべられ左の古圖と得て其形を知ぬ。又
ふとくのう云ふ。今も羽州秋田船越天王比船祭の左北國北如き笠とす

桔梗笠がくらむべ

桔梗笠古圖

貞享の比の繪え此番ばかり

大神樂打だいじんがくうち
傳人しゆじん



天和貞享の比ひ幼北おさか乃繪卷ゑまき
うつぶ箇うつぶと載のなり笠かさへ青あお黃き赤あか

一間いちまんちくさんちくさんへろどへろど



大神樂打だいじんがくうち
少年せうねんの體たい



元様もとよの體たい
繪ゑ此番ばかり

秋齋問語あきざわもんご云い「昔太刀ときた二つけ
美少びす年ねん乃の秋あき子この體たい」

沙金袋さかなふく
山本西武撰やまもとせいぶせん
明曆めいり万治ばんじ此刻しき

馬ま西に

秋あき

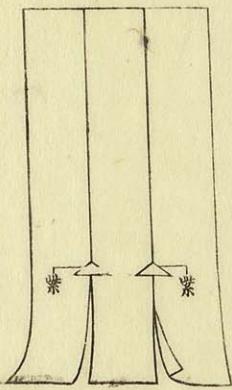
齋さい問語もんご云い「昔太刀ときた二つけ

火打袋ひうちふくと三角さんかくは絞しめる紙し子こ又また火打ひうちの名なゆり此說ことわかられど三角さんかくは絞しめる火打袋ひうちふく

何なん事こと浮世袋うきよふくも三角さんかくは絞しめる火打袋ひうちふくれ遺の失なて浮世うきよの如ごと雖ま事ことある余あり。堺さかいの卵子酒おんじしゅ宝永六ほうえい年ねん著あ之の三さん。昔九軒町くじんまちの繁昌はんじょう一いつな

後あと又またも稱い一いつか々かか一いつ

○首持袋くびせの布ぬ袋ふく浮世うきよ袋ふくと拂ほり一いつと又また此こ是れてくの小こまんまんの浮世うきよ袋ふく紙し子こ三さん角かく形がた細ほそく
つづりがる浮世うきよ袋ふく紙し子こ細ほそくももろとく
古車こくるに之の加まの重おいと多おくとくらうとく
かくもくとく進すすむ世よをそののすとくれ繪ゑ此こ華はなとつけ



本朝俗諺志

延享四年印本

卷之二云「今傾城町の喫茶屋皆此乳と似て乳者外乎か」

延享元年印本「此乳者外乎か」

。

○又童女れ引業とぞらふまつりは公と見ゆるがくとくに葉落れ木の三角形ものを
うき出アリシニモ其形れ似れれたゞシ

○又童女みたりを汝浮世タクハムクのへ慶安明暦元禄れヒモをもあらひり一文 吾吟我集
慶安二年序比文少「汝ミ人代えん秋葉て、瓦を多め小すどれども雪化けあねばむを

末得著序比文少「汝ミ人代えん秋葉て、瓦を多め小すどれども雪化けあねばむを

。

如云「トヨモミテ

新續大統波

七夕 しまじよ船 海うきせうひのす

正信

俳諧系屑

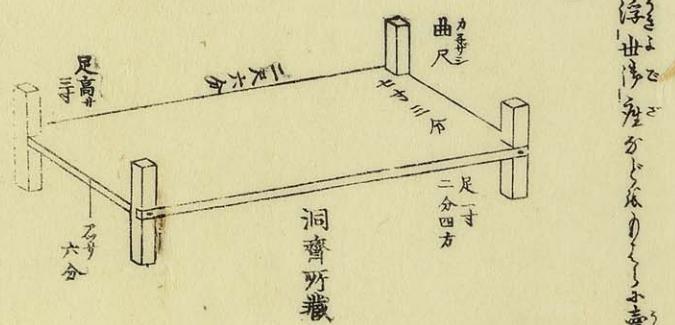
元禄七年印本

志之部志之部「共世経。共世名」とく解取と出で題等とて證しもべー

が不案の小昔へとて當世様とて浮世とソレタタケレモ古き事能比狂言の
きへトむことよりふ異のいへる言ふ「やくくとや婚のくらたと人トやにうて云」とくもゆく
これ當世人とりが如一。岩佐氏と浮世又兵衛とくひー。當世様の人物と画きもゆゑ
き人。又案のみ貞享の比かけ物乃本。浮世笠わづ 雅州府志 元年ふ浮世湯屋あり

○奥板の古製

上



文湖時代の酒食論より画卷又寛永
時代れ傳は此美板足そろの式正比
りれども古き事也。今も涼都の舊家
古物とぞ。今も涼都の舊家
されよゆき好事人丈臺カツマツテ
えがくもゆりと又申川河民家う金
これと用ひ表す是奥板とぞ裏を
裏とくる便利とぞりしぞ

○大津繪の佛像十一

元禄四年芭蕉粟津の無名庵あり一時正月四日

大津繪比筆のくじらへ何佛

口とまら絵そちふよ古へ仏像と画くと牛しととあう下當時の大津繪比仏と持仏小掛る老れくらりとゑみれのうつ仏繪比筆おこかく戯画へこりふなきうべへまへこそ當時左れどくれいど色白りたり

能説日本國元禄十六年印本 杏花園藏本

前々
附々
前々不知 大津繪著者不詳別家
遮分比筆著者不詳と指假也

一雕

本朝諸士百家記 宝永五年印本 卷之八云太坂長町七丁目小園廟屋善三郎著者不詳此老
裏店と罷闇著者不詳七十有余化老法師著者不詳中界方半ばかりは棚と物て大津
繪著者不詳とかけ一首の讚著者不詳

絵著者不詳本にまざりて泳院著者不詳泳院未來著者不詳間くわら

○又享保十一年竹田出雲著者不詳作せ伊勢平氏年々鑑著者不詳淨瑠璃著者不詳大津繪の十三
佛とよもとぞとぞれを宝永の比までもの仏繪と用ひ享保比もよもよ散在
ざるものかたゞ著者不詳今へとて見ゆるか一なまく或人著者不詳是と云ふ摸著者不詳くわくは后へと
但今も大津著者不詳仏繪多はくわくは昔れもいそくたぐり

○因ふ云 一代男

天和二年印本

詔花堂藏本 卷之三云寺泊比傀儡の家はままとて条云「屏風」乃

押繪著者不詳を絵著者不詳くわくを拂著者不詳人形板木押の弘法大師崩比嫁入縁金固
左夷著者不詳の多門店を赤門著者不詳連奴著者不詳これより大津追分著者不詳そのものぞくとん都かづ
くわくと天和比ハ戯子著者不詳繪ともよきとあらび

○又五ヶ瀬津の草紙

刻板年号辨著者不詳卷之四云「浮鹿機竹左字よおこす

枕屏風追分繪著者不詳の金と君ふくればくに赤門著者不詳てある所後見て云く
芭翁著者不詳と據著者不詳今と昔と失ひざるより大津繪著者不詳の昔と失ひて女比能の
芭翁著者不詳と考ふて演芭比糸著者不詳と考ふて

大津繪佛像縮圖

總長曲尺一尺七寸
廣七寸五分強

頭と両手は木彫りで、印外は筆そ
れにさす。ころも墨墨輪後光選華等ともいふ
丹蓮華ある。

白口



萬色

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

廿一

廿二

廿三

廿四

廿五

廿六

廿七

廿八

廿九

三十

卅一

卅二

卅三

卅四

卅五

卅六

卅七

卅八

卅九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一枚の紙小上下中。一文字。風帶形と彩色。
おきて描軸よもぎの匁

芝峯軒所藏

井澤宿因

墨

同二尊來迎佛

云朱墨寸尺ばかり前おお。

尚志堂藏

竹



黄土

スミ

丹



奥書二云

作者 遠近道印 五

繪師 萩川吉兵衛

元禄參年庚孟春吉旦

○ 淺葱 橋 [十三]

慶安二

年印本

卷之上は青玉板也。此は之を表す。右一等

昔淺葱 橋とて物なり。右之双紙

慶安二

年印本

卷之上は青玉板也。此は之を表す。右一等

比繪の所。打ひまつはり。右之双紙

慶安二

年印本

卷之上は青玉板也。此は之を表す。右一等

雍州府志 同三年上梓 土産門云。二條の南北新田所製。繻 橋とて。黒漆比上繻

色并小赤白の漆とて。花鳥と屏云。原書漢文。此を表す。其制作とかるべ

貞享元年卷之四小富士考の事。京から御殿と御殿の間に。其の静たる向ひ

年印本。卷之四小富士考の事。京から御殿と御殿の間に。其の静たる向ひ

海山下居敷。二百人前の浅黄 橋。三町どう。牡丹島とて。久我。久我。自由ハ花車。玉

て。何うき。鼻も人ふき。膚も夢見く居て。下品。下品。下品。下品。下品。下品。下品。下品。

元禄七年印本。此も浅葱 橋とて。出でて。當時もくく用ひゆる。象を

かうだべ。俳諧系脣。元禄七年印本。此も浅葱 橋とて。出でて。當時もくく用ひゆる。象を

晋子十七回

享保八年刻

前

子かんたーとがひを生

み

津秋

雪魚

御伽名題紙衣

元文三 年印本 卷之二 小淺黄桃比彌子而元文の比毛をもつゝ ものを

今へと多く名づか聞えどすかねらのとくに昔りう用ひす歴代今へとしてうれもの
いとおり

○重箱硯蓋 下三

或書小重箱ハ慶長年中重箱食籠よりとづまそ始て製造トシテ
アリ。今後重箱の衝重の遺製アリ。衝重ヒ制アリて縦高ヒキテ縦高ヒ足
トシテ至る。重箱トシカバ古重箱小肴箱と組入松板折板をくわせりの衝重
肴箱地と組入る飾と畳ぐるのとあがゆ衝重も経る。スオリシテ松板ヒ号
ウシ但食籠ヒ号ハ重箱ヲ少一多ラシト
衝重縁高。食籠ヒ名ヒ出く重箱ヒ出さむと 古制ヒ食籠ヒ也。文
化名見る。左ヒ或書小重箱ハ慶長年中始てアリ。右ヒ或書小
重箱ハ貪文龜本ヒ 鰐頭屋歸用ヒ。重箱れ名目アリ。トナリトナリトシム人能乃

下学集 文
漢書

下学集 安

狂言花の春シテ「時ハニシメヒト先孟ヒトおもてん。」とてモ一たゞヒト存トそ

る事ナリ。後ヒト生シテ、いきゆ。と。スモ次ヒ被櫻ヒタモ拾ヒ金指モ也。ヒテ肴
箱ヒ出ゆ。又鈍根草シテ「狂言」
ヒテ元禄ヒモテ古画或ヒ印本ヒ繪ナシト参考ヒ。酒宴ヒ肴と盛器ヒ
とて重箱ヒ松檜草花カドヒテ、とく盛り。食籠。かく盛り。盛り。まく
ヒテ今ヒ現蓋ヒ。カドヒテ近年ヒ造出。さりのとや十日ヒ繪ヒ刃ヒと
○元禄十 年印本ヒ繪ヒ重箱ヒテ硯蓋カドヒ子酒

宝承七年板ヒ繪ヒ硯蓋カドヒ子酒

玉川祐信ヒ。け。印本ヒ繪ナシト河原ヒテ重箱のとて重箱ヒ。これ後
ヒテ重箱ヒ者ヒ盛。元禄ヒ未ヒす。而ヒて硯蓋ヒ盛。宝承年中ヒ
始ヒ。アヒトおり。但硯箱の蓋ヒ葉ヒ成載ヒ。かく記録或歌集ヒふくと

自笑は草紙

年

板

ヒ

二箱

ヒ

交

ヒ

自

笑

ヒ

草

紙

山の井

慶安元年印本 卷之五
新黒谷比花見の事とある所にても観鏡や花地の事

よもやまのとまどひにあたるゝ事と云ふ事とありて、もとより
物語の傳とづきりとせば、ゆゑに近世好事は考古之草と盛りて、もとより
観鏡の蓋と看とせん。始よりてつひの一種に、其物にからむをいふ事と
観蓋の式正ふ用ひる事はあらず。今民家にて正月屠蘇酒に看と重箱の盛
へ宝永以前れ古風に残るものなり。

三足猿

支考 摂上様に年号す

按弓の宝永比うべ 著作堂藏本

蘭小

附合竹子 蘭比香に葉子しきりもどぞ観蓋

観蓋ふ葉子と盛りたり。近へ出でるをもす。本朝諸上百家記 宝永五年印本 卷之五
詰ひて此蓋、葉子と盛りたり。結の一端をやみけんすてく云ふ。そぞ
みもやくつり観蓋ふ葉子と盛り。葉子と盛り。かくらうやまくま
者と盛。一種に葉子と盛り。宝永以後に半ナシ。今と風ぐれ形よ遣りて

観蓋と称ふ。原とくの如く

○二足三文 十四

今物の價の安さ故に二足三文とく。説へ元金剛の價とく。物語
刻梓の年号切とく。寛永の下之卷より。金剛。杏花園著本。二そく三文もくめと云ふ。の所
狂歌と載り。金剛ハ草履ぬくひたり。蘭金剛。葉金剛。板金剛種くゆり

○三線鼓弓古制 十五

松代兼 元禄十一年板。水永禄の比琉球より地皮二絃の樂器と云ふ。泉州螺の花色法作
中・小路の者一絃とて三絃不ぞと世ふ。とくと呼。寛永よりよく盛り
おり。左ふ。摸出とく。寛永正保れ比の古國へ水永より。寛永より
名近づく。今。の形。ふ。そく。とく。と。○鼓弓古制も左ふと云ふ。

○元禄の比琉球より三絃。阿良の比。今。の。とく。と。名。け。き。の。不。何。も。る。

も。な。多。少。機。は。う。も。金。て。見。が。元。語。芭。法。作。は。も。う。い。で。く。も。る。

寛永正保比古画から三線の
古御衣と見るべし

美少年の男子の体へ



万治年間印本
東海道名所記
所載

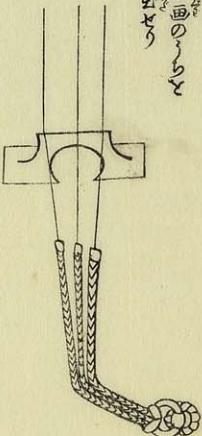


万治の比古画

寛永比古画の三線と
模要して模せり

根緒ある銀と云ふくも今此
異へ盲人へ模す事と云ふ此銀耳

音ノ質と
此人



○寛永正保比

古画から

鼓弓は古製

弓短小

眼弓

眼弓

眼弓

眼弓

眼弓

眼弓

眼弓

眼弓

眼弓



○寛永比古画の三線と
模要して模せり

模形

内

和名鈔

今按

野人_{ノシニ}鹿皮_{カツバ}為半革_{ハナヅク}革名曰多鼻_{タチノス}。用此革皮二字_{ニシテ}乎_ト。

足袋_{アシダケ}革_{カサグ}制_{ツレ}元_{ハリ}。昔應仁前_{キヨヒジ}貴賤男女_{ミツイタタク}すべて革足袋_{アシダケ}と用ひたり文祿_{モノク}乃

比_ハ古画_{コトハ}刀_{タケ}小攜_{シラフ}紋_{ムカシ}草足袋_{アシダケ}と_{シテ}男子_{ヒトス}り紫革_{シモロク}乃足袋_{アシダケ}と_{シテ}女子_{ヒトメ}。

室町殿日記

十之卷。長一の奥方_{カタ}用ひ_{シテ}あくどくせー

註文乃うち

「一也_{シカニ}足袋_{アシダケ}ひも_{ヒモ}ハア_アこれをかわうり拂付_{ハシマ}く

十足_{ハシマ}と_{シテ}天文_{ヒタチ}の

比_ハ當時_{ハシマ}れ婦人_{ハシマ}も紫革_{シモロク}の足袋_{アシダケ}と_{シテ}するを獨語_{ハシマ}也_{ハシマ}「我_{ハシマ}ト_{シテ}考_{ハシマ}の

中_{ハシマ}慶長元和_{ハシマ}の比_{ハシマ}生_{ハシマ}するの男_{ハシマ}女_{ハシマ}と_{シテ}寛永_{ハシマ}也_{ハシマ}と年_{ハシマ}盛_{ハシマ}て経_{ハシマ}り

と_{シテ}男_{ハシマ}冬革_{ハシマ}のうちかけ革_{ハシマ}袴_{ハシマ}と美服_{ハシマ}女_{ハシマ}紫_{ハシマ}の革_{ハシマ}乃_{ハシマ}襪_{ハシマ}と_{シテ}くをまき

り_{ハシマ}と_{シテ}その襪_{ハシマ}へ我_{ハシマ}と_{シテ}勿_{ハシマ}時_{ハシマ}比_{ハシマ}も_{ハシマ}をも_{ハシマ}りて何_{ハシマ}アリ云_{ハシマ}」_{ハシマ}と_{シテ}ある。

又志之双紙

慶安二上之卷_{ハシマ}紫_{ハシマ}物_{ハシマ}乃_{ハシマ}天和_{ハシマ}の_{ハシマ}童_{ハシマ}一人_{ハシマ}り_{ハシマ}紫_{ハシマ}麻_{ハシマ}子_{ハシマ}乃

小袖_{ハシマ}と_{シテ}紫_{ハシマ}足袋_{ハシマ}と_{シテ}身_{ハシマ}と_{シテ}なり云_{ハシマ}」_{ハシマ}のれを寛永慶安比_{ハシマ}ある_{ハシマ}。

紫足袋

都風俗鑑

延宝九年木板卷之二云「足袋_{ハシマ}白革_{ハシマ}と

案_{ハシマ}たびと_{ハシマ}の_{ハシマ}と_{シテ}氣_{ハシマ}の_{ハシマ}と_{シテ}腰_{ハシマ}方_{ハシマ}人_{ハシマ}云_{ハシマ}「あし_{ハシマ}相_{ハシマ}」_{ハシマ}一名女五經_{ハシマ}也_{ハシマ}「たびと

白革_{ハシマ}と_{シテ}足袋_{ハシマ}」_{ハシマ}と_{シテ}あると延宝比_{ハシマ}より_{ハシマ}て紫足袋_{ハシマ}と_{シテ}れる

かん○貞享三年比印本_{ハシマ}老女_{ハシマ}事_{ハシマ}と_{シテ}來_{ハシマ}「苧桶_{ハシマ}と_{シテ}うの織_{ハシマ}紐_{ハシマ}」_{ハシマ}西鶴織留_{ハシマ}正徳二年印本_{ハシマ}卷之二云「ある老女_{ハシマ}」

身_{ハシマ}紫_{ハシマ}革_{ハシマ}たび_{ハシマ}足袋_{ハシマ}と_{シテ}の殊_{ハシマ}數_{ハシマ}目_{ハシマ}西鶴織留_{ハシマ}正徳二年印本_{ハシマ}卷之二云「ある老女_{ハシマ}」

身_{ハシマ}若_{ハシマ}き_{ハシマ}時_{ハシマ}比_{ハシマ}と_{シテ}語_{ハシマ}「我_{ハシマ}も_{ハシマ}人_{ハシマ}花_{ハシマ}緑_{ハシマ}乃_{ハシマ}りん_{ハシマ}き_{ハシマ}相_{ハシマ}の革_{ハシマ}一體_{ハシマ}」

そ_{シテ}姿_{ハシマ}作_{ハシマ}て_{ハシマ}め_{ハシマ}振_{ハシマ}舞_{ハシマ}の時_{ハシマ}流_{ハシマ}美_{ハシマ}し_{ハシマ}菊_{ハシマ}の絹_{ハシマ}比_{ハシマ}ね_{ハシマ}を_{シテ}し_{ハシマ}人の弟_{ハシマ}紫_{ハシマ}足袋_{ハシマ}

と_{シテ}花_{ハシマ}と_{シテ}アリ_{ハシマ}云_{ハシマ}」_{ハシマ}と_{シテ}貞享の比_{ハシマ}より_{ハシマ}て紫足袋_{ハシマ}と_{シテ}も_{ハシマ}の_{ハシマ}か_{ハシマ}し_{ハシマ}ゆ_{ハシマ}ん

裁衣_{ハシマ}足袋_{ハシマ}と_{シテ}の_{ハシマ}來_{ハシマ}「寛文の比_{ハシマ}を女_{ハシマ}紫_{ハシマ}革_{ハシマ}か_{ハシマ}と_{シテ}一_{ハシマ}丈_{ハシマ}長_{ハシマ}白革_{ハシマ}

か_{ハシマ}き_{ハシマ}久_{ハシマ}革_{ハシマ}も_{ハシマ}り_{ハシマ}綵_{ハシマ}も_{ハシマ}り_{ハシマ}を_{シテ}も_{ハシマ}ら_{ハシマ}ん_{ハシマ}を_{ハシマ}云_{ハシマ}「一_{ハシマ}足_{ハシマ}そ_{ハシマ}一年_{ハシマ}も_{ハシマ}二_{ハシマ}年_{ハシマ}も_{ハシマ}三_{ハシマ}年_{ハシマ}を_{ハシマ}用_{ハシマ}ひ

う_{ハシマ}天_{ハシマ}和_{ハシマ}の比_{ハシマ}木_{ハシマ}綿_{ハシマ}比_{ハシマ}畦_{ハシマ}の足袋_{ハシマ}と_{シテ}云_{ハシマ}」_{ハシマ}今_{ハシマ}彼_{ハシマ}是_{ハシマ}と_{シテ}參_{ハシマ}考_{ハシマ}も_{ハシマ}紫_{ハシマ}足袋_{ハシマ}天_{ハシマ}文_{ハシマ}の

比_{ハシマ}と_{シテ}寛永慶安比_{ハシマ}を_{シテ}も_{ハシマ}り_{ハシマ}く延宝天_{ハシマ}和_{ハシマ}の比_{ハシマ}も_{ハシマ}り_{ハシマ}く_{ハシマ}人_{ハシマ}翁_{ハシマ}草_{ハシマ}卷之

昔ハ男女とも革足袋と用ゆ明暦後革の價高きよりて木綿足袋と用ゆ
「りもれども」
林立地名
寛永元年印本富士若狭越後新潟等處に於て之を織ざるに木綿たびを
頭中で顎かく云々とあれを寛永比も木綿足袋多めふん所

○丸ばくーの文様

下七

慶安より万治寛文比女の衣服丸尽ー北文様おもかげあり

山の井 慶安元年刻

秋乃野比舟一葉比彌や丸ばくー

嵐山集 慶安四年撰明暦三年刻

花くすくす 日新や丸ばくー

安明

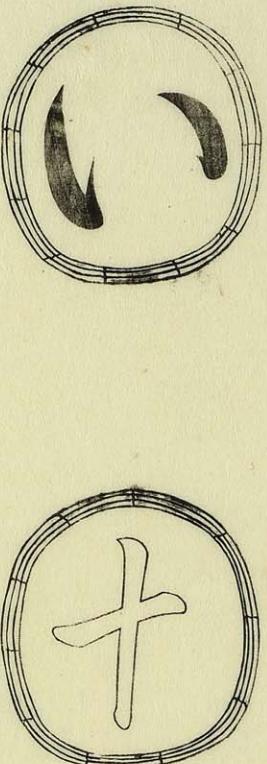
新繪大寫波集

秋乃野比舟一葉比彌や丸ばくー

品芝

万治寛文の既て盛り後は戸三浦屋の名姓傳來者より後其妻からくる小袖と卓圍
又つらぐ出生地信州筑前或寺を寄附する今すある。或人其文様を二ツ
臨して手よ河へ下る左はあくまどり是又万治寛文比丸ばくーの文様北もくあくまどり

一説也



地紺縫子故妙綾形縫文様丸ばくーのいろは四十八文字并み一二三れ數字を
なり。丸の起へ白く染ゆき文字は黒紫萌黄等北色並としとく。丸のらぐのやう
金糸と見てゆく。丸の大小異同ありしを。

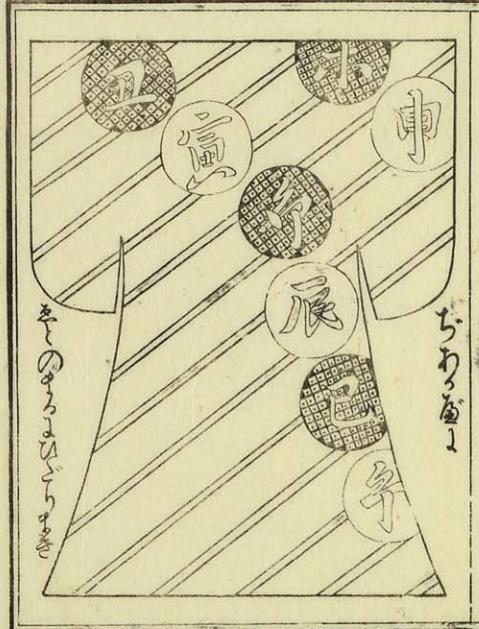
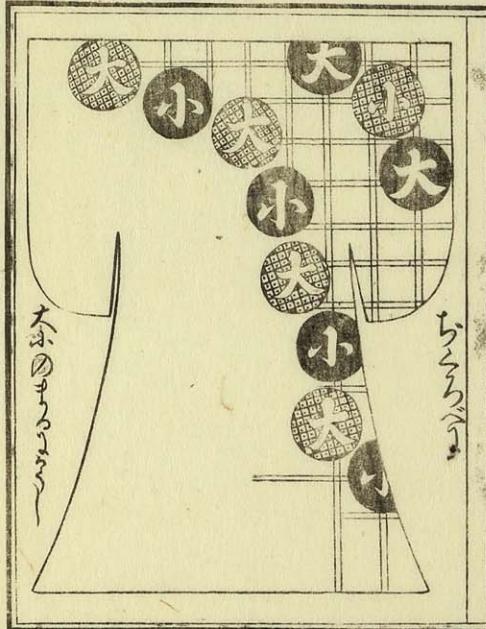
九尽文様雛形二種

寶文六年
印本
新撰雛形
所載
飄水子淺井
了意序
不

同書所載

右八草園と山雜形と
符合もとてそのま
の流行をもと
の流行をもと

○天和貞享比の印本
妙重宝記とし物の
一の巻又友禪染れ
毛皮一語もとあり
これ一語もとあり



題目図時繪香合

織て汎掛地ニ蓋ハ画
御等繪り大き
圖如一



按寛承時代に古事記洛北傳學
寺村或ヘ松山城主也。題目踊の事ある
處は現る。大正元年丹前著一之
松の葉元保十卷之一三絃鳥組此歌ニ
京でく。一条柳屋久雄四ツ新草とたまふ
かけくへふ。腰ウエストあらわすくしらへん
則是もくべつへらへくもく三絃サンガ日本本
娘マサニの歌作り出せ。時代歌小手
寛承時代からもう少し女ひの歌と
され盤とびとくらうを紀元する物也
かくさうり寛承元年より今久化十年
かくちもと百五十年をめぐり

山東庵齋藏

○祖父祖母之物語

十九

異制庭訓

遊戲之事といふ。絆クモリ振簾スカムラ石子イシコ礲打スルタ竹馬タケマ馳ハシル編木摺ヒノキハラ文字結モチコト

文字書モチコト書占モチコト何曾モチコト宿世結モチコト宿世燒モチコト

祖父祖母之物語

目比頭引タチヒタヒ腋挿アキラハラハ指引タチヒタヒ指引タチヒタヒ

腕推ウツヅル指扒タヂルツノタヂル

出アツム今按モモリ鼓タム擗石タマハ和名鈔モチコト

又西行の歌モチコト

石子イシコ絆クモリ居モチコトやモチコトかモチコトなモチコト絆クモリもモチコト居モチコトやモチコトとモチコトあモチコト。

これ今云手モチコト文モチコト字モチコト結モチコト花モチコト絆クモリ吹モチコト。書占モチコト歌占モチコトのたぐひ歌モチコト。宿世結モチコトハ今云
絆クモリ絆クモリ。祖父祖母之物語モチコトハ今畫モチコト絆クモリ也モチコトを御りよりの思モチコトべ。

目比モチコトヘ今云手モチコト文モチコト字モチコト結モチコト花モチコト絆クモリ吹モチコト。書占モチコト歌占モチコトのたぐひ歌モチコト。宿世結モチコトハ今云
絆クモリ絆クモリ。祖父祖母之物語モチコトハ今畫モチコト絆クモリ也モチコトを御りよりの思モチコトべ。

又手モチコト考モチコトへ追書モチコトもモチコト。

○辨疑書目錄

ふ異制庭訓モチコト文惠法印作。元遊景社來と同本。多く誤。

元禄五年板の書籍目録

ふ。虎闘作。正一ノ爲。其故へ。遊学生來へ去。惠
此作ニ寛文二年印本。其文異制庭訓と異る。或人云制庭訓
とへ。本名ふ。往す。下。玄惠は庭訓往来事。もしく後代名からと云。故
まうれども。本名つうふれども。稱べ。シテ。

○源平盛衰記

卷之鼓判官石四口とよて一二と實とよてとす。石子れまひ

かるべー小大君家集

俊頬朝臣ハ散木集

鷗ふ。石子の歌

童遊の考へのうか。別録

游遊

遊遊

本

三十一

○持游無木

三十

遊学生來

少性は遊學。被草被。破木持。礪牆。獨樂也。持抱。石子。持抱。無木。一持
小面白。竹。茶餘。小車等。極風為松。詩葉。遊學事。并傳本。解。故。左。右。上。
下。世。持抱。し。よ。と。持。ハ俗。化。弄。乃。字。そ。と。所。を。と。訓。字。き。と。字。義。小。う。解
く。今。持。あ。伊勢の門神事。お。も。ぐ。ら。う。と。ソ。木。り。手。と。う。で。謡歌。も。

ゆく。と。ゆん。此。名。目。童。持。お。う。と。は。だ。て。う。ま。戯。と。持。遊。と。不。知。ス。一。○無。木。と

ス。ハ。撃。壤。比。木。お。う。一。東。海。道。そ。の。も。き。一。と。う。す。一。東。闕。そ。う。つ。き。と。う。り。之。之。
つ。と。そ。て。つ。く。ゆ。き。む。き。と。り。も。き。し。り。の。わ。き。と。う。り。も。と。音。相。通。き。

一。○き。は。ご。ん。た。形。の。ち。ひ。も。と。木。と。地。え。立。も。が。形。比。木。と。ね。く。打。つ。る。戯。を。る。

題。唐。土。お。も。幹。く。う。一。本。ア。三。才。國。會。云。以。一。村。爲。壤。前。廣。後。鎮。長。一。尺。
四。寸。闊。三。寸。其。形。如。一。屢。腦。節。少。童。以。爲。一。戲。先。側。ニ。壤。於。地。遙。

於。三。四。十。步。以。二。手。持。壤。持。之。中。者。為。一。上。又。見。干。風。土。記。此。方。東。闕。そ。め。き。と。う。

戲。お。れ。ふ。せ。い。る。和。漢。か。か。一。戲。之。和。漢。三。才。國。會。一。擊。壤。お。げ。と。う。も。假。字。と。つ。り。う。

遊学生來

の無木ハ是多々。

○打出小槌 懈蟹合観

三十二

異制庭訓

小。祖父。祖母。之。物。語。一。わ。ら。お。む。し。く。ぢ。と。し。と。り。ま。う。と。と。り。ま。う。

發語

四五年前童話比出本と云て多きもあつた。今は童話考と名づけ一冊あり
考れ足りぬ。年々へへひらかれた。さて隱蓋隱蓑へ古歌ふも何より
あれども。打出の小槌の事とあつてあるもれどく。あれども

女御の段云「是ぞ誠の鬼ともがゆ。あからくうりのく。まこと打出の小槌と
御の段云「是ぞ誠の鬼ともがゆ。あからくうりのく。まこと打出の小槌と

べ。」盛衰記卷之九六おとこも相成る題と同説。

の宝物集卷之一云「されど人比宝也。打出の小槌と人物と能宝よく傳て云々。
廣野ふかく。居るゝ人家や面白うん妻男や。遣能くん徒老馬牛食料衣物
多く。心よ任て打出く。かくとんこそ。中界能侍べりと云ふ。又人傍く。指却く云々。
様へ打出は小槌ハめでたま。室そ有ども。口情奉へ。拍と打出く。樂くて居ます
程。鐘化声とぞん聞つれを打出す。拍皆くと失ふ奉れ候ふ。うねり
自云處て居るゝ思へし。左様の時へ廣野中只独裸そ居るゝ人ある。
法場え。中界昔より隱蓑の少将と申と相語り。有増敷奉仕佑て候ふとを

酉陽雜俎續集の青色得る金椎子と和漢相似

室相集

○又猿蟹
本雜事
ナサズ
追テ根
本雜事
ナサズ
可考
但シ天
見二
多義集

合戦と云童話の原と云ひ。さあかり義楚六帖四十二云。根本雜事云。有隱人
在果樹下坐。被猿猴擲果。俄額忍之不報。後有識者與仙人為友。來
在樹下坐。擲如前。獵者怒射之致死。佛與天受。かくとぞ。按。猿蟹
合戦の詰へ此果樹と根と。枝葉とぞく。童話の原と云ふ。かく
仙說。りゆう。或へ國史物語。もくもく或へ漢土は故事。ユモトブモトモム。かく
かく。其理と分離する。況女勸懲。一時免めてもよし。りと
て云ふ人の作り出しあつて。虎闘和尚の異制訓。今文化十年。五
五百年前の書かれば。祖父祖母の童話にちぢれ。五百年前の童話。唯童話
書くふつて。今ふ讀もん。不思議。かく。愚考。他日童話
考を刻もう。志。かく。考。かく。考。かく。

○ちまき馬 さうり牛

三十四

源法師

ちまき馬 さうり牛

散木集

三十五

手のこもりとゆく

まうり牛ひまくさー

まうり牛ひまくさー。今按ふ。ちまき馬と牛は、まうり牛と胡風を遣りする馬也。まうり牛は胡風を遣りする牛也。こへらすに馬と牛牧は馬ふひへ。胡風牛と本賣は牛ふひへ。秀白。今世聖靈會ふ。或ハ風船子そ牛馬と遣りて手向ひ。其坐はかづらす。人散木集。俊頼朝臣比集。俊頼朝臣。鳥羽院の御宇天仁の比の人々を以て。天仁元年より今文化十年より。馬とつゝをセタみ手向ひ。或へおひれ。今信濃常陸下總分地圖。天仁元年より今文化十年より。馬とつゝをセタみ手向ひ。ある。其の茅巻は馬胡風の牛へ。元七夕。手向ひのやまと繫がゆ。牛の縄は七夕の縁ゆ。かくもかく七月あれど。それからて靈棚の手向ひ草をめし。或へ靈棚。

手向ひ前ゆく。七夕の手向ひ後。まんくまれあまの事なり。

○奈良の庭 寓

三十五

世間胸算用
元禄五
年印本卷之四云。正月奈良中の家へお遊び。金めて焼火を。度ふ數物一そ。ちの家用並れも下人もむしろお樂居して。不珍の居間。宿。く。而乃ゆうりへそ。酒を入る丸餅と。鹿火と。燒食もいやす。云。とく。とく。とく。昔の庭電は考へれりべ。これ前ふ少地火炉の遺風を。

○元禄三年の

ちまき馬のうち足の脚の骨髄の骨がよどぐ。

睿慮ふて縛ふ民や 庭電

芭蕉

其角

散木の内にも何處を。座電へ京良のふりをく。蓋京良が其原をやむ。

○江戸吉原ふ今も正月座電燒火の事あり。それまことに附會の説とべども。實へ座電れ遺風を。昔わざかへ一樣とはか京良の座電乃もかひふく。灰元吉原へ

比より傳へる物をかくへなす。今へ度を焼火をもの

○長崎柱餅并車木

三十四

世間胸算用 卷之四。長崎の年は暮の春とある條。饼へ其家のお餅がある
べくつさう。柱もしくては車輪が一とと大きき柱がうらつけて在。正月十五日比左義
長のそとれと面倒りて祝ひ。おこ處か幸ひ木とそ横をもあら。餅いと車
轔不離離子。ゆゑに爐網赤い。昆布輪。牛蒡。大根。二日みつまをも。餅屋乃
り。此木みつまがて竈とあざり。とでも大晦日は度み入れた。地にひじを與らる
多く。おでつうしめびと太く。又蒸檻。當年丸えられ油も潮も無く。
家くどくぬまうら。おつまむもにゆめを。おくしてくとす。これ元禄年中比
年。長崎北ノ小問。此柱餅北遺風。今もたり。餅と延命袋の形がつゝ。大黒
柱み打つけて。墨春かうすてものづつ落らばまらて。わざくらうとぞ。

○宗祇の蚊帳

三十五

嵐山集 畜安四年撰明暦一年刻

井がそ面白絹の夢ね。寝とおりぬよ
お角。蚊帳ふ林へ則り。義哉。眞徳

筆は愈々清ふ。宴か余物もと宗祇のかやし
ひすりぬれくちと故事小説ひん

以上右の集ふとく。此後元禄。

西鶴あらうの友 元禄十二年刻

卷之四云

比もひい竹かみや
ひくひく。商人集りて。今宵ハ七月七日生もある。甚だ天の川。かくの如く。鳥は
は巣と立ててそと星力ある事。と子細。何んといづれも。手打て。多く人下ふ
まれぬ。人へ。公家の。するので。我へ。すれど。と連歌師。北宗祇法師。諸國を
修行。一派の時。人比縁の。もれぬ。あり。東海道。岡部の宿を。相宿。同ト。蚊屋ふ。行
く。昔物語。云。人情。今も。う。年も。かく。と。まづ。を。かく。人。如。此。

骨董集上編中之卷終